



「ぐひっw 暁ちゃんっすかまくえたっ」

「やだっ、は、離し…スカート捲るのダメえっ！
暁のぱんつ見えちゃうっ！」

「あれえ？ 暁ちゃんはお子様ぱんつじゃなかったんだあ
意外だなあ」

「と、とーぜんでしょー！ 暁はレディなんだからー！」

「うんうん、これじゃあおじさんがチンポ
ブチこみたくなるのも当然だよねっ」

「……へ？」

「初モノロリマンだけに流石にキツウい！」

「え……あ……え……？」

「これで奥まで……ふん！
やったね暁ちゃん！これで本当に大人のレディになったよ！」

「あ……な……何……これ……
暁……何、されてるの……？」





「はあっ、はあっ！
初モノ特有のこのキツさたまらん！」

「い、きいっ！い、痛っ！
痛いっ、やっ、やめっ……！」

「ごめんね睨ちやんっ、全部出すまで
腰、止まらないっ、ぬんっ！」

「出……すっ、出……す……何……を……
痛……う……う……う……う……！」

「やっ！
やっ！
やっ！」

「やっ！
やっ！
やっ！」

「やっ！
やっ！
やっ！」

「ぎゅん
ぎゅん
ぎゅん」



「ああっ、出るっ!!
特濃」ってりザーメン出るウー!」

「何…これ…?何か…入って…
暁の中に入ってきてる!」

「まだまだ種付けっ、暁ちゃんに種付けえ!」

「やだ!やだやだあ!
これ以上入ってこないで!
怖いっ、怖いよおおお!」

ハハハハ

ハハハハ

ズルッ

ハハハ

ズルッ



「うっ……びぐ……ぐす……
やだっ……やだっ……言ったのに……」

「ごめんごめん、気持ち良すぎてつい
次からは優しくしてあげるから」

「っ……ぎ？次っ……」

「あれ？聞いてなかった？」

「暁ちゃん達は俺達整備班のサポート任務に
着くことになったっ……」

「まあもこんなサポートとは思ってないだろっけ？」

「そ……んな……」



「はあつはあつ、流石レディな暁ちゃんっさつきまで処女だったのにオマンコからもう「こんなにいやらしい音してるよっ」」「あ……あ……も……やめ……」

「暁ちゃんが俺の赤ちゃん孕むまで毎日頑張るからねっ、ふんっふんっ！」

「あ……あつ……た……助け……しれえ……かん……何で……こんな……」

「あ……あつ……た……助け……しれえ……かん……何で……こんな……」

「あ……あつ……た……助け……しれえ……かん……何で……こんな……」



「ふひw逃げたら駄目だよヴェルちゃん
これも任務なんだからさw」

「私達が聞いたのはサポート……
こんなのは任務じゃ……」

「ヴェルちゃんを一目見た時からこうしたくてたまなくなつてさあ
こんなんじやおじさん、仕事に集中出来ないなあw」
「そんな理屈が通るわけ……」



「はあっはあっ、ヴェルちゃんのマン」良すぎてチンポとろけそうだよっ！」

「んっ、んっ、んんんっ！」

「気持ちいいなら声我慢しないでいいんだよっヴェルちゃんの可愛い喘ぎ声聞かせてっ」

「何…をっ、馬鹿な…ひんひんひんひん！」

おしおしおし

おしおし

おしおし

おしおし

おしおし

おしおし

おしおし

おしおし

おしおし



「ああっ、もうイクっ、ヴェルちゃんの膣内につ
赤ちゃんミルク出るっ！ぐうっ！」

「うあっ、やっ、駄目！それだけは…
あっ…あっ…あああああっ！」

「ヴェルちゃんの可愛いとろけ声で
ドロドロミルクまだまだ出る出るっ！」

「あっ…あっ…うあっ！
だ…めえっ！ミルク…だめえっ！」

びびり

びびり

びびり

びびり

びびり

びびり



「あ……あ……うあ……」

「ふう……初めてなのにあんなに声出すなんて
ヴェルちゃんはエッチな子だったんだねえ」

「ち……ちが……そんなわけ……」

「それとも無理矢理されるのが好きなのかな？
ヴェルちゃんとはんだト変態さんだなあw」

「そ……んな……私は変態なんかじゃ……」



「はあっはあっ、ニニ」？
ヴェルちゃんは「グリグリされるのがいいの？」

「あっ…あっ…ひんっ！
や…やあっ…ぐりぐり…やあっ…」

「やだって言ってもまだ可愛い声が出ちやつてるよ？
大人チンポでグリグリされるのそんなに好きなんだ？
それじゃもっとしてあげるねっ」

「やっ、あっ、あっ、ひあっ！
私…なんで…こんなっ…ひうっ！
おかしく…おかしくなっちゃ…あああっ！」

か

か

か
か
か

か

か



「ぎひっwもう逃げられないよんっ、とー」

「あうっ…く、首が…っ…
は、離し…っうあっ…」

「ひひっwいっねえその反応
もっと虐めたくなるっでもんよw」

「く、苦し…のです…ゆ、許して…」

ギョッ

ガッ



「許すも許さないもないんだよなア
いい声で鳴いてくれよオ?ふん!」

「あつ、がつーうあつー!
や、やめつ…そんなのつ、入らな…あああつ!」

「この膜をフチ破る感覚いいわ
」から奥まで「気…オラ!」

「ひ…お…」

「ぐひっwどうよ電ちゃん
大人の極太チンポの味はよオ！」

「あつ、あつっ！ち、血が…っ
血が出て…痛うっ！」

「女になった証じゃねえかw
感謝してほしいくらいだわえ」

「これ以上はっ、お股っ、裂けちゃっ
ひゅんっ！」





「うっ…ひぐ…ぐすっ…」

「おいおい俺様のザーメンを垂れ流すとは何事だオイ全部飲み込めって言ったよなア？」

「ひぐ…ひぐ…めんなさいっ」

「りゃっさり調教してやんないとなぐぐひつっ」

「おんっ…」

わんわん

わんわん

ゴッ

わんわん



「ふひっ駄目だよ雷ちゃん
ちゃんとお仕事してもらわないと〜」

「離してっ!こんなの任務内容に入っていないんだから!
司令官が聞いたなら只じゃすまないんだからね!」

「上の方は今別の作戦でいっぱいっばいだからねえ
雷ちゃん達にかまってる暇あるかなあ?w」

「司令官なら私が言えばきつと...!」

キッ!

キッ!



「あゝもう「チャゴチャツるせえ!!」
てめえは俺のチンポの世話すんのが仕事なんだよオラあ!!」

「がっ!! あっ!! ああああっ!!」

「ハハハ! 流石初モンのロリマンだっ
狭すぎてすぐ出ちまいそうだわ!!」

「何!!!! れっ!! 私!!!! 今!!!!
何され!!!! あっ!! うああっ!!」

あ#わ!!



「はあっはあっ！雷ちゃんの初マンコ美味え！
チンポにギチギチ絡み付いてきやがる！」

「はっ、あっ、うあっ！
は…離し…てよ…っ、あああっ…」

「こんな極上マンコを手放すワケねえだろっ
奥までじっくり犯し尽くしてやるわ！」

「うっ…い…痛…い…よ…っ！
絶対…っ、司令官に…っ、言いつけてやるんだから…っ！」

10

水子

水子



「あ……あ……あ……」

「ふう……今までで一番出たわあ
こりゃ妊娠確定ってやつかなw」

「にん……しん……わ……私……が……？
な……何で……」

「ん？雷ちゃんにはまだ早かったかなw
まあそのうち嫌でもわかるようになるさw」

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ズッ



「いい感じにほぐれてきたマン」もたまんねえっ
「こりやチンポが萎む暇ないわ」

「あ……う……あ……」

「へっ、すっかり大人しくなったな
まだまだギンギンなんだからしっかりしてくれよオイ」

「……そ……んな……こんな……いつまで……
た……助け……しれ……かん……みんな……」

ずちゃ

おは

おは

ズクッ

どちゃ!

「おっと、今日は暁ちゃんからしてくれてくれるのかな？」

「男の人を悦ばせるのもレディの嗜みだもん♡」

「そいつは素晴らしい考えた！
でも暁ちゃんにそんなテクあるのかな？」

「とーぜんでしょ！暁はレディなんだから！
おちんちんいっぱい蕩けさせてあげる…えい♡」



「制裁のトドメに大人の特濃ザーメンを…ぬ…」

「んあ…やっ、やあ…あ、熱いの
あち…」

「ぐっ、マンコが更に締め付けて…
まだまだ出るわ出るわ！」

「ああ…しほ…
しほ…入ってくりゅっ…
あっ…あっ…あぁあぁあぁっ…」



「あ……はっ……はあ……はあ……」

「ふう〜、我ながら大量に出したもんだわ」

「うっ……暁がするって……言ったのに……」

「このザマで一人前のレディとは片腹痛いっ
これは朝までガッツリ仕込んでやらねば！」

「……ふん……」





「あゝ出る出るっ、また出るよ暁ちゃん！」

「しゅごいしゅごいのまた出たあ！
せーしゅごいしゅごい気持ちイイよお！」

「マニコでチンポをしごく様な腰使い…たまらんっ！
あゝまた勃ってきたわ！」

「ひあつ♡暁の中でおちんちんまたおつきして…
あゝあゝあゝ！気持ちイイのっ、止まんないよお♡」

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

「ロゼちゃん？」

「ん？なんだい？」

「えっと…これは？」

「騎士位というものなんだけれど…どっかおかしかったかな？」

「ロゼ、じゃあな366」

「ああ、これは私からするものなんだね
不勉強ですまない…じゃあ、始めようか」

じい

オシ





「んっ…んっ、これでっ…いいっ…のかなっ…んっっ」

「ヴェルちゃんが自分から腰を振る光景を見られるとは…たまらんっ！」

「喜んでもらえて…んっ、何より…だよ…っ」

「声を押しこもして気持ちいいのを隠さずとする様もまたぞるっ…」

「君は本当に…んっっ…
こころっ…な、中でっ…暴れちゃ…んっ…んっ…」

ちゅっ!

ちゅっ!

ちゅっ!

ちゅっ



「ごんなのっ、我慢出来な……ぐっ……」

「あ……ご……ち……つ……まだ……早……つ……あ……ん……つ……な……中……で……膨……ら……ん……で……っ……」

「ああ……出る……出る……つ……全部……出る……つ……ヴェルちゃん……の……膣……内……に……全……部……出……る……わ……っ……」

「ん……つ……あ……つ……つ……ホント……に……ま……だ……出……て……っ……ご……ん……な……の……っ……声……で……我慢……出来……な……の……っ……つ……あ……あ……あ……あ……つ……」

ヤッ!

ヤッ!

ヤッ!

ヤッ!

ヤッ!

ヤッ!



「…はあっ…はあっ…ん…あ…」

「ふう〜、こんなに出了のは久しぶりだわあ
もう玉の中空っぽだよ」

「っ…まだ…っ…」

「ん？」

「…本当に…全部…出たのかい…？」

「…ん…っ…」

んん

んん

んん

んん



「ヴェルちゃん……流石にもう……」

「だめ……だよ……まだ……私が……」

「……え……」

「……っ……ま……まだこの子が……」

「固い……っ……ままじゃないか……」

「そっ、それは……ヴェルちゃんの膣内が良すぎて……」

「はあ……はあ……いい子……だね……」

「それなら……もっと……もっと……」

「も……もう好き……っ……で……っ……」

ムッ

キキキ

キキキ

キキキ

ムッ

ムッ

ムッ



「ふい、今日も頼むぜ電ちゃん」

「は、はい...ど、どうぞ

召し上がり下さい...なのです...」

「あ、これこれ

電ちゃんマンコで仕事の疲れも癒されるわ」

「あ...ん...ん...う...っ...」



「ぐひっww可愛い」と言いよるわっ
褒美の膣内出し受け取れい！」

「っあーだ、駄目…これ駄目え！
きちやう…っ、へんなの…っ、きちやう！」

「ほらいけ！ザーメン膣内出しで
イクツラを見せてみい！」

「あ♡あ♡あ♡んああああ♡♡♡♡」

グハッ

グハッ

グハッ

グハッ

グハッ



「オラオラどうだった、この淫乱マンが」

「はっ♡あっ♡はひっ♡」

「えっちなおマンコでっ♡」「めん…なひゃっ、ひあっ♡」

「まだよがるかコイツはっ！」

「そんなにチンポが好きかオイ！」

「しゅきでひゅっ♡」

「チンポだっしゅきどろまん♡」

「だったらっつ壊れるまで犯してやるよオラあ」

「あああああっ♡♡♡」

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

「雷ちゃんただいま〜」

「……………」

「あゝ今日もかかったるかっただわ〜
雷ちゃんがいなかったら仕事なんて
とっくに辞めてるよな〜」

「……………」

「ん？ああ、スイッチ入れるの忘れてたわ」

L...W





「よ…っとお…」

「……っ」

「ふひwチンポを入れると元気になるなんて
雷ちゃんはホントにエッチな子だね」

「あ……う……あ……っ」

「未だ衰えぬこの締めりっ
あゝ生き返るわ」

「……あ……う……あ……っ」

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

「あゝイクイクっ！溜まりに溜まった
ザーメン出るウー！」

「Pppppppp！」

「こんな状態でも射精でよがるのは
なんというっ！だったら好きなだけ
注ぎ込んでやるわ！」

「……あつ……はっ……あつ……！」





「あっ…あっ…はあ…っ」

「はあっ、はあっ、…そういや明日は司令がごつちに戻ってくるって言ってたな。ぐひw」の雷ちゃん見せたらどんなツラするかw

「し…れえ…っ？しれえ…かん…？」

「チッ、司令には反応すんのかクソがっ…ひひwなら今よりホロクソにして司令の前に放り出してやるよっオラあー」

「しれえ…かん♡しれえかん♡…すき♡…だいしゅきい♡…っ」